

## 2019年度 学位記・修了証書授与式 理事長祝辞

ご卒業おめでとうございます。

夏目漱石の“坊っちゃん”は東京理科大学の前身である東京物理学校を 1900 年前後に卒業したことになっています。その坊っちゃんは、卒業に際し「三年間、まあ人並みに勉強はしたが、別段優秀な方でもないから、成績はいつも下から勘定する方が早かった。しかし、不思議なもので、三年きっちり卒業できてしまった。自分でも可笑しいと思ったが、自分の方から苦情を言う理由もないので、大人しく卒業しておいた」と語っています。

このように、坊っちゃんが留年せずに卒業できたことを不思議がるのには、もっともな理由がありました。それは、物理学校が、“入学するのは難しくないが、進級するのは非常に厳しく、卒業できる者は極めて少ない学校”として有名だったからです。坊っちゃん在籍していた頃、例えば 1889 年の入学者は 309 人、その中で落第せずに卒業できた学生は 11 人のみでした。

当時の先生方は非常に熱心で、とても学生思いでした。しかし、世間の信用を裏切らないために、実力が付いてない学生は容赦なく落第させたため、このような評判だったのです。本学の建学以来の伝統である“実力主義”とは、困難に正面から挑戦し、真剣に鍛錬を積んで克服し、それによって培った力をもって社会に貢献するというスピリットに他なりません。すなわち、単に知識の表面を理解するのではなく、何が本質的な問題なのかを見極め、理論の背後に潜む原理の根本まで徹底的に突き詰めて、自分の血肉にしようという精神です。

私は 1972 年に理工学部経営工学科を卒業し、ある食品企業に就職しました。入社後、様々な部門に配属され、時には全く専門外の部署に配属されたこともありました。しかし、どの部門であっても、やるべきことは克服すべき状況の原因を突き止め、どうすれば打破できるかについて同僚達と喧々譁々の議論を戦わせていくことです。このようにして、前例のない課題をひとつずつ解決してきました。これは、実力主義の実践のささやかな一例だったと、私は本学で学び育てられたことを有り難く思いました。

「こんな環境では、いい仕事なんかできない！」

「上司が自分を評価してくれないから、能力を発揮できない！」

そう言って、自分にできる努力をやめてしまうのであれば、社会の中で自分を成長させることは難しいでしょう。それは、企業であっても、学校であっても、研究機関であっても同じことです。理想的な条件や完璧な環境が最初から与えられることなどありません。与えられた環境の中で自分に何ができるのかを考え、その条件のもとで成果を挙げていくことによってしか次のチャンスは回ってきません。チャンスがやってくる環境を普段から整えている人のところに舞い込むものなのです。

同様に、良き友、良き先輩、良き仲間というの、恵まれるか否かは、その人の心掛けに依るところが大きいものです。すなわち、自分の心の中に「相手を利用しよう」とか、「この人と付き合うと得だ」などといった邪心で人と付き合う人には、結局、自分と同じように考える人とは巡り会えないのです。利害が一致している間は仲良くやっているようですが、何かある

と簡単に亀裂が入るような人間関係でしかありません。皆さんには、共に成長しあえる真の友、すなわち、信頼と思いやりと尊敬でつながる友を持っていただきたいと思います。

「キャリアアップ」、「社会での成功」という言葉は大変華々しい響きを持っていますが、その実体は何かと言えば、より多くの人に影響を与え、より大きな責任の伴う課題に取り組むことに他なりません。社会で責任のある仕事を果たしていくためには、自分の専門技能を磨き続けていくと同時に、広い視野で物事を考え判断する力が必要であり、そのためには、世の中の動向、国際感覚、教養……と、様々なものに関心をもって貪欲に広く学び、実力をつけるための努力を続けていかなければなりません。

"大学までに学んだ知識や技能で一生食べていける時代は終わった"と言われて久しくなります。本学も、実力主義のDNAは堅持しつつ、新たな姿へ成長していく只中にあります。教育内容の充実と研究力の増強を目指し、学科の抜本的な見直しを計り、また、AI、宇宙、データサイエンス等の時代の潮流にある分野にも益々力を入れ、本学の学生の学びと教員の研究活動を活性化していくとともに、意欲溢れる社会人がいくつになっても、何度でも、働きながら時代のニーズにあったスキルアップやキャリアアップを計るための実践的な学びの場にもなろうとしています。

東京理科大学は、皆さんが青春時代に学んだ思い出の母校として存在するだけでなく、厳しい社会環境の中で切磋琢磨する皆さんと共に成長し続け、皆さんの実力鍛錬の要望に応えられる生涯の学びの場として、いつでも皆さんに開かれているのだということを、心に留めておいてください。

最後に、坊っちゃんが在籍していた頃、物理学校の校長だった中村精男先生が、卒業生の色紙に書いていた言葉を、現代語にして、皆さんへの餞（はなむけ）の言葉として贈ります。

「前へ、前へ、わきめもふらず、困難にも屈せずに、前へ進め！その先には、きっと幸せが待っている。月桂冠はきみらのものとなるであろう」

もう一つあります。

「希望と執着と忍耐とを旗印として、途中で投げ出すことなく戦え！勝利の栄光は遂にきみらの上にかがやくであろう」

本日は、新型コロナウイルスの蔓延に伴うリスク管理の観点から、皆さんの門出を共に祝うことが出来ず大変残念ですが、このような国難のときこそ、「理学の普及を以て国運発展の基礎とする」との建学の精神のもと創立された本学卒業生の力が求められています。

皆さんが、理科大生の気概を持って、大きく翔いていくことを期待しています。

2020年3月17日

学校法人東京理科大学理事長

**本山和夫**